

平成 26 年度

発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業

成果報告書（概要版）

実施機関名（栃木県鹿沼市教育委員会）

1. テーマ

研究成果の一般化を目指した発達障害の可能性のある児童への早期支援の在り方の研究
～効果的な校内支援システムを基盤として～

2. 問題意識・提案背景

小学校低学年の指導は、非常に大切であると考えられるが、学級では、多様な児童を一斉指導という形態で指導しなければならない、多様性に応じた指導は十分であるとはいえず、ましてや児童の認知特性に応じた学習の保障も難しいのが現状である。

また、本市では、全国学力・学習状況調査の結果を分析すると、学力向上の観点からも小学校低学年から読み、書き、計算についての効果的な指導の必要性が出てきた。

さらに、本市が新たな教育の指針として策定した「鹿沼市教育ビジョン」（平成24年～33年）の基本施策「新しい教育課題への対応」において、発達障害に対して、早い段階からその子にあった教育が行われるよう対応していくことが掲げられており、行政主導による発達障害に対する支援の推進が期待されている。

そこで、これらの課題に対処するため、学習面のつまずきに対する児童を早期発見し、その児童に応じた支援に早期に取り組んでいこうと考えた。

3. 指定校について

（小学校の場合）

指定校名：鹿沼市立みなみ小学校												
学級数及び児童生徒数												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	42	2	32	1	29	1	30	1	36	1	32	1
特別支援学級	1		2		3		6	2	3	1	5	2
通級による指導の対象者数												
教職員数												
校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	相談支援員	スクールカウンセラー	その他	計		
1	1	13	1	2		1				19		

4. 指定校における取組概要

1 適切な実態把握等による早期支援の実施

(1) 読み、書き、計算のスクリーニングの実施による早期把握の工夫

ア MIMを活用した読みの能力を把握するためのアセスメントの実施

イ 発達性読み書き障害(発達性 dyslexia)検出のためのスクリーニング検査の実施

ウ 特異的発達障害検出のためのスクリーニング検査の実施

(2) 早期支援のための校内支援システムの構築

(3) ICTによる支援ツールソフトを活用した早期支援の工夫

2 すべての児童に配慮した授業等、指導方法の改善

(1) 学び合う関係づくりを重視した授業の構築

(2) 学び方を学ぶ授業の構築

3 学習面での補充指導等の実施

(1) パワーアップタイム(朝の学習)において、スクリーニング検査等の結果をもとに、5グループを編成し ICTを活用しながら、読み、書き、計算の苦手な児童への対応を試みる。

(2) チャレンジタイム(国語科の個別学習)において、MIMを活用した「読み」の指導、視覚・読字・書字・ビジョントレーニングなどの ICTを活用した学習を実施する。

(3) 算数に学びにくさをもった児童への習熟度別学習において、デジタル教材を活用し、直観的思考を活かしながら、簡単な計算の自動化を試みる。

4 発達障害支援アドバイザーについて(人数：1人、指導日数：13日)

活動内容としては、教育的アセスメントや教員へのコンサルテーション、研修会の講師、指定校保護者への発達相談であった。また、教職員との連携に係る工夫として、ユニバーサルな授業づくりへの助言や校内委員会における指導、チーム支援づくりへの助言、個に応じた支援に対する助言を行った。

5. 主な成果

1 指定校の取組の成果

(1) 適切な実態把握等による早期支援の実施について

MIMや様々なスクリーニング検査を行うことにより、ともすると教師の主観のみで判断し、見過ごされてしまいがちな児童のやりにくさを客観的に把握することができた。

また、蓄積された客観的なデータからその児童が学習を受ける場や方法、内容について特別支援教育推進委員会で十分に検討され、校内支援システムが効果的に機能した。

更に、「読み」が苦手な児童については、語彙数が増加し、言葉でのやりとりがスムーズになったり、「計算」が苦手な児童については、10の合成や簡単な計算の自動化に改善が見られたりするなど、ICTによる支援ツールソフトを活用した早期支援の成果が得られた。この成果は、パワーアップタイム等の様々な学びの場を確保し、様々な学習機能の強化等を図ってきたことが大きな要因としてあげられる。

(2) すべての児童に配慮した授業等、指導方法の改善について

「学び合う関係づくりを重視した授業」では、お互いの意見をよく聴き合い、共に学び教え合うといった児童の学ぶ姿が見て取れ、親和的な学級に近づいてきた。「学び方を学ぶ授業」では、マルチ知能理論を導入することにより、やりにくさをもった児童が、自分の得意な力を使って授業に積極的に参加するようになった。

2 教育委員会の取組の成果

本事業の教育委員会の目的の一つは、教職員の発達障害に関する専門性の向上であった。ねらいに応じた研修会を通して、指定校以外の小中学校管理職の特別支援教育への意識の高揚や、MIMに関する活用法の理解について成果が得られた。

6. 課題と今後の対応

1 指定校の取組の課題と今後の対応

実態把握においては、そのアセスメントの分析・解釈の妥当性や信頼性の問題も含めた検査技能を向上させていくことや、検査を行う教員の育成、検査を実施する時間をどう捻出していくか等、運営面での課題も残っている。今後は、小学校低学年学級担任を中心とした担当者を対象とし、MIM のステージ別の指導方法やアセスメントの分析・解釈等に特化した研修を他校教員とともに複数回継続的に実施し、教員の専門性の向上を図っていききたい。また、運営面については、「ことばのじかん」を創設し、取り組んでいきたい。

早期支援においては、ある一定の成果は得られたが、ICT ありきではなく、その児童の特性を考慮した支援であったかどうかや、支援ツールソフトを活用したことによる児童の客観的な評価について課題が残っている。支援ツールソフトには、主にトレーニング的なものと、基礎的・基本的な知識・技能を習得するソフトとがあり、個々の児童のつまずきややりにくさに応じたソフトの有効性も含め、評価について研究を深めていきたい。

学び合う関係づくりを重視した授業では、教師の対応の工夫や「聴く」ことを手だてとしたが、自己有用感や自他のよさの認め合い等の高まりの点からも精査が必要であると考えている。また、学び方を学ぶ授業では、学び方を学ぶことに授業のねらいが置かれ、意図と違った授業展開になっていくなど、授業本来の目的である授業のねらい達成に向けた授業展開に課題がみられた。今後は、発達障害支援アドバイザーによる指導をいただきながら研究授業、授業研究会の実施による校内授業研究会を通して、課題を克服していきたい。

2 教育委員会の取組の課題と今後の対応

本研究の基盤となる発達障害の理解において、発達障害者支援法による「発達障害」の定義とともに、各障害の特性や支援方法等の理解からも研修が必要であったのではないかと、MIM やスクリーニング検査の各学校での確実な実施等についての課題も明らかになった。今後は、本研究の目的でもある指定校の研究内容及びその成果についての一般化に向け、再検討していきたい。

7. 問い合わせ先

組織名：栃木県鹿沼市教育委員会

- | | |
|-------------|-----------------------------|
| (1) 担当部署 | 学校教育課指導係 |
| (2) 所在地 | 栃木県鹿沼市今宮町 1688-1 |
| (3) 電話番号 | 0 2 8 9 - 6 3 - 2 2 3 6 |
| (4) FAX 番号 | 0 2 8 9 - 6 3 - 2 1 1 8 |
| (5) メールアドレス | m01yuzawa@city.kanuma.lg.jp |